



Title	恋愛関係における愛情と関係評価に及ぼす相互作用パターンの影響
Author(s)	清水, 裕士; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2004, 4, p. 119-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3554
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

恋愛関係における愛情と関係評価に及ぼす相互作用パターンの影響

清水 裕士(大阪大学大学院人間科学研究科)

大坊 郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究は恋愛関係の安定性がカップルの相互作用によってどのように予測されるかを明らかにすることを目的とした。そこで相互作用に焦点を当てた Kelley ら(1983)の因果分析(Causal Analysis)を再考し、親密な対人関係を3つの領域(事象生起、相互作用パターン、状態特性)に分類するモデルを提案した(ループ・システムモデル)。そしてそのモデルを基に、恋愛関係における相互作用パターンがパートナーへの愛情と関係への評価に及ぼす影響について、現在恋愛関係にある大学生 119 名(男性 74 名、女性 45 名)に調査を実施し検討を行った。その結果、親しさを強く示し期間が短い人は熱愛的な愛情を、頻繁に親しさを示し期間が長い人は穏やかな愛情を持っていることが示された。また、強く頻繁に親しさを示す人は関係を認知的な側面において高く評価していることが明らかとなった。

キーワード: 相互作用パターン、愛情、関係評価、恋愛関係、因果分析

問 題

本研究は、青年期の恋愛関係における関係の安定性について実証的に検証を行うことを目的とするものである。恋愛関係は多くの青年にとって関心があり(松井, 1990)、また、うまくパートナーと関わっていこうと思っているにもかかわらず意に反し関係が終結してしまうことは少なくない。故に、恋愛関係の状態がどのような要因によって変動するか、どうすれば安定させることができるのかについて明らかにすることは十分意義があろう。

現在までも恋愛関係の安定を予測するために様々な構成概念間の因果関係が実験、調査研究によって明らかにされてきた(e.g., Arriaga & Agnew, 2001; Filsinger & Thoma, 1988; Rusbult, 1980; Simpson, 1987 など)。しかし、それらの知見は社会が望むような答えを与えるものであったかどうかについては疑問が残る(松井, 1998)。

例えば多くの追研究を生み出した投資モデル(Rusbult, 1980)は、コミットメントを予測する上で非常に有効なモデルではあるが、予測変数である満足度などをどうすれば高められるかという議論はあまりなされておらず、結局どうすればコミットメントを高めることができるのかという問いに答えることは難しい。実生活における対人関係の統制を目的とした場合、認知的な構成概念だけでなく、行動による制御をも必要とされるだろう。関係内の成員の相互作用が生み出すダイナミズムを未だ十分に理解されていないことが、社会の求める答えにたどり着けない一つの原因となっているのではないだろうか。

Kelley, Berscheid, Christensen, Harvey, Huston, Levinger, McClintock, Pelau, & Peterson(1983)は、様々な構成概念の因果関係についての膨大な数の研究に直面する中で、対人関係

研究のより基本的な視点へと戻る必要性を訴えている。そして、彼らは対人関係の理論的枠組みとしてシステミックな相互作用に重点をおいた因果分析(Causal Analysis)を提案している。その視点は非常に示唆に富んでおり、対人関係研究の視野を見直す意味でも改めて考察する価値があると思われる。以下に Kelley et al.(1983)の因果分析について詳細を述べる。

Kelley et al.(1983)の因果分析

因果分析は対人関係という現象を 2 人の相互作用(Causal interaction)と、背景にある状態特性(Causal condition)¹⁾に分け、その間の循環関係(Causal link)を考察する分析の方法(枠組み)である。

相互作用とは対人場面で連鎖的に起こりうる事象(event)の全体を指す。事象には、相手から何らかの影響をうけて生起する認知、感情、行動が含まれている。すなわち相互作用は「相手が笑う(action)と私はうれしい(affect)」といった事象の連鎖的な結合(Causal connection)によって成立するのである。そして、事象同士の結合を矢印であらわし、相互作用の時系列的な様子を視覚的に表現している(Figure 1)。また、彼らはそのような 2 人の事象の結合を 4 つの特性(property)によって考察している。それらについて説明しよう。

1 つめは、2 人が与え合っている影響(あるいは経験している事象)の頻度で、2 人がどれほどの頻度で会い、どれほど一緒にいて、どれほど会話をしているかを表す特性である。Figure 1 では矢印の数によって表現することができる。2 つめは 2 人が与え合っている影響の強さである。2 人がどれほど強く親しさを示し、相互に依存しているかを表す特性である。Figure 1 ならば矢印の太さにあたるだろう。3 つめは 2 人が与

え合っている影響(あるいは経験している事象)の多様さである。それは 2 人がどんな場所に行き、どんな種類の会話をし、どれだけ多様な感情を経験しているかを表す特性である。Figure 1 のような図で表すならば矢印の種類などで表現できるかもしれない。最後の特性は 2 人が影響を与え合ってきた期間であり、2 人がどれだけ長い間一緒に過ごしてきたか、を表すものである。Figure 1 の「時間」にあたるといえるだろう。その他にも、影響の均衡、不均衡といった特性についても議論されている。

このように、彼らは親密な対人関係の相互作用を「事象の連鎖的発生」としてとらえ、それら事象の結合パターンを影響頻度・強度・多様性・期間という特性を用いて表現している。またこれらの議論をふまえ、彼らは親密な関係を「互いに強く、頻繁に、多様な影響を及ぼしあう、ある程度の期間を経た相互依存的な関係」として定義している。

また、彼らは相互作用に影響を及ぼしうる状態特性に注目している(Figure 1)。状態特性とは「事象の生起に影響を及ぼす、比較的变化しにくい要因の全体」と定義される。状態特性は具体的には「2 人の態度(愛情や好意など)」、「規範」、「関係への信念(関係への評価など)」、「身体的要因(スキルや能力など)」、「社会的要因(関係外の友人など)」といった概念を指し、個人的・環境的要因すべてが含まれる。つまり、彼らのいう状態特性とは親密な対人関係における「場(生活空間)」(Lewin, 1950)の特性に対応していると考えられる。Lewin(1950)によれば、生活空間とは個人と環境を含めた、行動を誘発する要因のすべてを表しているからである。Kelley et al. (1983)はそういった個人的・環境的要因を「状態(Condition)」という言葉で表現しているのである。

以上のように、因果分析では親密な対人関係という現象を先に述べたような「相互作用」と「状態特性」の複合的なシステムとしてとらえている。つまりこの分析方法はわれわれが実際に経験する事象の連鎖的発生と、その背景に考えられる個人的・環境的な状態特性が相互に影響を及ぼしあう循環的プロセスである、という視点から対人関係の進展を説明しようとするのである。

だが、ここで注意したいのは「事象」と「相互作用」の関係である。相互作用は事象の時系列的な連鎖によって成立するものである。この 2 つの位相は異なっている。相互作用は事象の総和ではなく、事象と事象をつなぐ結合の全体的なパターンであると考えなければならない。

今まで議論してきた Kelley et al.(1983)の分析をふまえるならば、親密な 2 人の相互依存性を問題に

する上で「2 人が何を行っているのか」だけでなく、「2 人がどのように行っているのか」にも目を向けなければならない。またその 2 つを区別して考える必要があるだろう。よって Kelley et al.(1983)の表現との混乱を避けるために、事象の連鎖的発生によって成立するものを「相互作用パターン」と呼ぶことにする。相互作用パターンは、事象そのものではなくその過程が問題とされるような潜在的構造であり、各対人関係システムを特徴付ける重要な領域である²⁾。

親密な対人関係のループ・システムモデル

このように、親密な対人関係という現象は以下の 3 つの領域によって理解することができる。まず 1 つめは実際に 2 人が体験する事象生起(認知・感情・行動)の領域である。ここでは 2 人がどのようなことを感じ、どのように振舞うのかが問題とされる。つまり対人関係システムにおける作動的側面である。2 つめの領域は相互作用、すなわち事象が結合するパターンである。2 人がどのように相手に行動し、それによってどのように感じているかが問題とされる。対人関係システムの構造的側面といえる。3 つめは状態特性の領域である。2 人がどのような相互依存状態にあるのか、関係をどのように評価しているか、どのような規範がそこにあるのかが問題となる。対人関係の機能的側面といえるだろう。

従来の親密な関係における進展・崩壊の研究は、そ

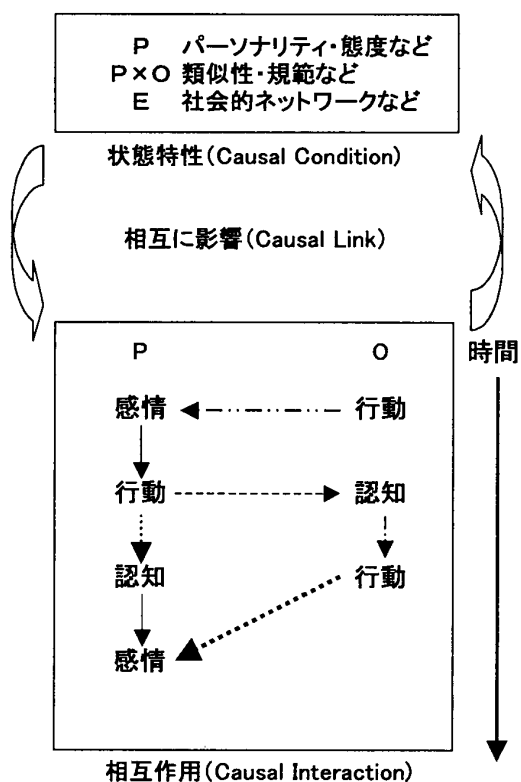


Figure 1 因果分析(Causal Analysis)の視覚的表示

の多くが状態特性の領域に含まれる要因間の因果関係を扱ってきたといえる。Kelley et al.(1983)の表現を借りるならば、それらの要因は個人的要因(PあるいはO)、関係性の要因(P×O)、環境的要因(E)に分けられる。個人的要因は投資モデル(Rusbult, 1980)やアタッチメント理論(Hazan & Shaver, 1987)、社会的スキルなどによって問題とされてきた。関係性の要因は相互依存性理論(Kelley & Thibaut, 1978)、自己拡張理論(Aron & Aron, 1986)、態度の類似性などによって扱われてきた。環境的要因ではつり橋実験(Dutton & Aron, 1974)による愛情と生理的覚醒の関係、または社会的ネットワークの影響などが検討されている。

しかし、親密な対人関係における安定性の問題は、2人がどのような影響を与え合っているのかという相互作用の領域と最も関係するところである。なぜなら、2人の親密な関係が続いているということはまさに2人が親密な相互作用を行っているという事実から判断されるし、崩壊したということは2人が相互作用をしなくなった、あるいは親密と判断されない相互作用へと変容したということである、と考えられるからである。

もし親密な関係の進展・崩壊に関する研究が、関係の質の向上や改善を目的としているならば、どのような相互作用のパターンがよく評価されるのか、あるいは行動を誘発する愛情やコミットメントといった状態特性とどのような関係があるのか、という問題も検討しなければならないはずである。

以上の議論をまとめるならば、3つの領域についての相互関係を仮定することで、ひとつのモデルを想定することができるだろう。すなわち、事象が連続的に生起することでそのパターンを生み出し、相互作用パターンがパートナーとの愛情や関係への評価、外部への排他性を生み出し、それら状態特性が事象の生起を誘発する、というループを考えることができる(Figure 2)³⁾。

しかし、このモデルの視点は新しいものではなく、Newcomb(1961)も同様の立場であったといえるだろう。なぜなら彼のABX理論は、3項関係における不均衡(asymmetry)が緊張を生み出し、2者のコミュニケーションを誘発することを予測するものであるが、

3項関係の不均衡(状態特性)と2者のコミュニケーション(事象生起と相互作用)のループを見出し、2者関係を説明したものであると考えられるからである(その他にも大坊, 2001; 神薗, 2000)。

しかし、このループ・システムモデルは状態特性の領域について限定的な部分のみに焦点を当てていることを指摘しておかねばならない。状態特性は関係の背景となる要因の総体であるために、非常にその意味範囲が広い概念である。このモデルではその状態特性の中でも関係成員の心理状態や関係の特性(凝集性や衡平性など)に重点を置いている。なぜなら、恋愛関係を一つのシステムとしてとらえた場合、それらの要因はよりシステムの中心的な特性であり、システムの作動と深い関係があると考えられるからである。

本研究の目的

本研究では以上で述べてきた対人関係のループ・システムモデルに基づき、恋愛関係の安定性が相互作用パターンによっていかに予測されるかを実証的に明らかにすることを目的とする。Figure 2のモデルでいえば、相互作用パターン領域が状態特性領域に及ぼす影響を検討することだといえるだろう。

相互作用パターンと関係の特性の関連については対人コミュニケーションの視点からいくつか研究がなされている(例えばGottman, 1979)。しかしそれらはよりミクロなコミュニケーション(実験室における会話など)に焦点を当てたもので、日常的な相互作用を問題にしたものではない。親密な関係をより深く理解し、制御するためには実際に行われている行動について議論する必要があるだろう。以下ではそれぞれの領域について、分析で扱う変数の詳細を述べる。

相互作用パターンの領域では、Kelley et al.(1983)やBerscheid, Snyder, & Omoto(1989)で取り上げられた、相互作用パターンの特性を対象とする。すなわち影響強度、影響頻度、影響多様性、影響期間という4つの特性のあり方によって相互作用が表現されるのである。しかしここで問題となるのは「影響(impact)」をどのようにとらえるかという点であろう。

ここで、影響の強さを「パートナーに対する依存性の強さ」というように読み替え、さらにKelley et al.(1983)が親密な対人関係を相互依存的な関係と定義

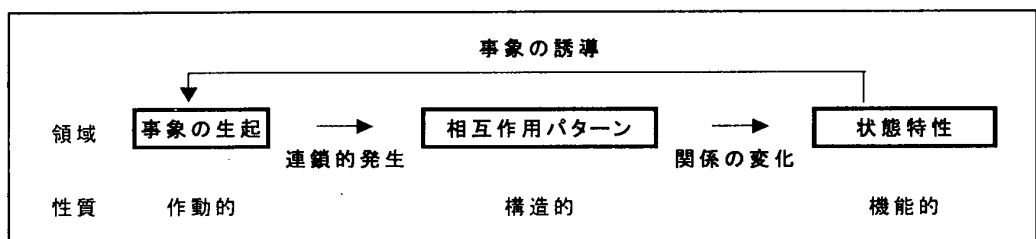


Figure 2 対人関係のループ・システムモデル

していることを参考にするならば、影響の強さを「伝える親密さの程度」として考えられるのではないだろうか。パートナーに親密さを伝えることが相互依存性を高める方法であるとすれば、それが影響を与えることであると操作的に定義できるだろう。

よって相互作用パターンの特性は、恋愛関係において日常的に行われる恋愛行動によって「伝えられる親密さの強さ、頻度、多様性」として扱うことにする。影響期間は恋愛関係になってからの交際年月として定義した。

状態特性の領域では、愛情と関係評価を対象とする。恋愛関係の安定性を問題にするにあたり、パートナーや関係をどのように評価しているのかを明らかにしなければならない。よって、パートナーに対して持つ比較的安定した感情として愛情を、関係に対するものとして関係への評価を取り上げることとした。

愛情は Sternberg(1986)の三角理論によって見出された「親密性」、「情熱」、「コミットメント」を使用する。金政・大坊(2003)は三角理論で表現される愛情が、対象や関係性の違いを包括的に扱えるものとして評価している。本研究においても相互作用のあり方との関係をその焦点としているので、恋愛関係という狭い領域についてもその関係の多様さに柔軟な説明を期待できる三角理論を採用することは有効であると思われる。

関係評価については「満足度」、「継続欲求」、「安定の認知」、「将来への関心」の4つを取り上げた。安定の認知とは関係が上手く行っているか、これから続いていくか、という判断と予測が含まれる。将来への関心は、関係への長期的な期待や関与を含むものである。

以上をまとめると、本研究は「相互作用パターンの特性」、「愛情・関係評価」の2つの領域について相互関係を明らかにし、日常的な相互作用から恋愛関係の安定性について記述・説明をすることを目的として

いる。

方法

調査対象者

現在恋愛関係にある、奈良県の私立大学生 119 名(男 74 名、女 45 名)。平均年齢は 19.25 歳、 $SD=1.53$ 歳(男 $M=19.17$ 歳、 $SD=1.58$ 歳; 女 $M=19.38$ 歳、 $SD=1.45$ 歳)であった。

調査方法

2 回の心理学の授業中において集合調査によって実施。対象者に「現在最も親しい異性」を思い浮かべてもらうよう指示し、その異性との関係についての質問に回答を求めた。現在恋人がいる対象者には恋人を、いない場合は家族以外の最も親しい異性を思い浮かべてもらうよう伝えた。調査時間は 20 分程度。

調査項目

1. 関係評価 現在の恋人関係に対する評価を測定する項目。満足度、関係継続欲求、関係安定の認知、将来への関心、それぞれ 4 項目ずつの全 16 項目。満足度は Rusbult(1998)の満足度の項目のうちから負荷量の高い 4 項目を翻訳して使用した。継続欲求は Arriaga & Agnew(2001)の関係維持への意図尺度と Rusbult(1998)のコミットメント尺度を参考に作成した「私たちの関係が長く続いて欲しい」、「私は、私たちの関係が長く続くように努力している」といった 4 項目を使用した。関係安定の認知の項目は「私たちは上手くいっていると思う」、「私たちの関係は安定していると思う」といった、どれほど関係が安定しているかあるいはこれから続いていくかという認知を問う 4 項目を作成し、使用した。関係の将来への関心についての項目は、Arriaga & Agnew(2001)の長期的関心尺度 4 項目を翻訳したものを使用した(それぞれ 7 件法による)。

2. 愛情の 3 要素 Sternberg(1986)において示された、パートナーに対してもつ愛情の要素「親密性」、

Table 1 各変数の男女別記述統計量

	α 係数	最小値	最大値	男平均	(SD)	女平均	(SD)	t 値
多様性		2.20	3.40	3.31	(.11)	3.26	(.22)	-1.58
強度		1.33	6.93	5.12	(1.31)	4.98	(1.11)	-.62
頻度		25.00	199.00	122.86	(27.33)	130.70	(29.78)	1.43
期間		1.00	8.25	2.96	(1.53)	3.36	(1.63)	1.32
親密性	.87	2.20	7.00	5.79	(1.05)	5.82	(1.01)	.19
情熱	.87	1.80	7.00	5.26	(1.16)	5.39	(1.11)	.58
コミットメント	.88	1.00	7.00	5.09	(1.35)	5.56	(1.13)	2.05 *
満足度	.86	1.00	24.50	5.80	(3.12)	5.55	(1.10)	-.52
継続欲求	.87	1.00	7.00	5.98	(1.20)	6.17	(.83)	.94
安定認知	.82	2.50	7.00	5.66	(1.05)	5.73	(1.08)	.37
将来関心	.64	1.00	7.00	4.84	(1.16)	4.84	(1.13)	-.03

* $p < .05$

「情熱」、「コミットメント」を測定する項目。金政・大坊(2003)の日本語版 27 項目のうち、各因子に負荷量の高い 15 項目(各5項目)使用し、それぞれ 7 件法で評定を求めた。

3. 恋愛行動の頻度 カップルが日常的に行う行動の頻度を測定する項目。この項目は相互作用パターンの特性である影響頻度と多様性を得点化することを目的としている。

松井(1990)恋愛行動について 10 種類の行動領域を見出しているが、それらの行動にはパートナーに対しておこなう行動だけでなく親や友人などの第三者に対して恋人を紹介するといった、カップル外の対象への行動も含まれている。本研究では 2 人間の恋愛行動について焦点を当てるために、関係外の行動領域を除いた。また恋愛関係にある 2 人の行動において、パートナーがほかの異性と関わらないようにするといった行動は恋愛関係では頻繁に経験するものであると考えられるので、より包括的に恋愛行動を扱うため排他的行動を追加した。

すなわち「友愛的会話」、「内面の開示」、「つながりを求める行動」、「協力」、「プレゼント」、「一緒に行動」、「婚約(将来に関する会話を含む)」、「性的行動」、「喧嘩」、「排他的行動」の 10 種類について、それぞれ日常的に行われると思われる 3 つの行動(全 30 行動)を松井(1990)と飛田(1991)を参考に選び、恋愛行動項目とした。それらの項目について思い浮かべている異性に対して日常的にどれほど行っているかを 7 件法で評定を求めた。

4. 恋愛行動で示す親しさ パートナーに対してどれほど依存性を示しているかを測定する項目。この項目は相互作用パターンの特性のうち、影響強度を得点化することを目的としている。上記の恋愛行動 30 項目について、それぞれの行動を、思い浮かべた異性に対して行えばどれほど親しさを表すと思うかという質問を 7 件法で評定を求めた。

5. 回答者のデモグラフィカルな変数 回答者の性別、年齢、思い浮かべた異性の年齢、交際期間、思い浮かべた異性との間柄(恋人・友人・その他 から選択)についての質問項目。

結 果

変数の得点化

1. 愛情・関係評価 関係評価、愛情はそれぞれについて、下位項目の平均値(関係評価は 4 項目、愛情の要素は 5 項目の平均値)を算出し、その得点とした。

2. 相互作用パターンの特性 恋愛行動の頻度と示す親密さから、相互作用の 4 つの特性(「影響頻度」、

「影響強度」、「影響多様性」)を以下のように算出し、得点化した。

影響頻度については 30 項目の行動を行う頻度の合計値(30~210 の範囲)を、影響強度は 30 項目の行動によって示す親密さの平均値(1~7 の範囲)を、影響多様性は 7 段階評定のうち 1 点(まったくしない)に回答した項目を除いた項目数を対数変換したもの(比較的高い得点の度数が多く、データの偏りを是正するため)を、それぞれ得点とした。「影響期間」は、恋愛関係になってからの期間を平方根変換したもの(付き合い合ってから期間が短い回答者が多く、データの偏りを是正するため)をその得点とした。

得点化した変数の平均値、標準偏差、信頼性係数(α 係数)を Table 1 に示す。性別によって各変数の値に差があるかどうかを t 検定によって検討したところ、コミットメントのみ女性の方が有意に高かった。しかし、他の変数には有意差が認められなかったため、後の分析では男女あわせて行うことにする。

相互作用パターンと愛情との相互関係

相互作用パターンと愛情との全体的な相互関連を検討するために正準相関分析を行った。その結果、3 つの正準相関係数のうち第 2 正準相関係数までが有意であったので、第 2 正準変量まで解釈する。ただし、本分析では変数群の全体的なパターンを考慮するために、重み係数を主に解釈することにした。また重み係数については、40 以上の変数のみを解釈の対象とした。正準相関係数及び重み係数を Table 2 に示す。

第 1 正準変量の重み係数において、相互作用特性の変数群では影響強度が正の、影響期間が負の比較的大きな値を示していた。よって第 1 正準変量は「付き合い合っていない、影響を強く与えあう」パターンを示しているといえる。それに対し愛情の変数群では、親密性と情熱が正の値で高く、コミットメントが負の係数を示している。よって第 1 正準変量は Sternberg(1986)の三角理論でいう「恋愛」のタイプであるといえるだろう。すなわち、第 1 正準相関係数は「付き合い合ってから期間が短く、強く親しさを伝えているようなパターン」と「恋愛」の関連を示しているといえるだろう。

第 2 正準変量の構造係数では、相互作用特性群では「影響頻度」と「影響期間」に正の大きな値が認められる。よって第 2 正準変量は「付き合い合ってから長く、頻繁に影響を与え合う」パターンを示すものである。愛情群では情熱が高い負の値を、コミットメントが高い正の値を示している。これは Sternberg(1986)の「空愛」あるいは「友愛」のような愛情であろう。親密性も若干ながら正の値を示していることからどちらかといえば

「友愛」に近いだろう。この結果から、第 2 正準相関係数は「付き合ってから長く、影響を頻繁に伝えるパターン」と、「友愛」的な愛情の関連を示していることがわかる。

相互作用パターンと関係評価の相互関係

次に相互作用特性と関係評価について正準相関分析を行った(Table 3)。有意な正準相関係数が第 1 正準変量までであった。行動パターンの変数群では「影響強度」と「影響頻度」の係数が正の値で高く、関係評価群では「安定認知」、「将来への関心」の係数が高い正の値を示していた。安定認知と将来への関心はともに認知的な変数であることから、関係評価の正準変量は「関係の認知的な評価」をしめしているといえるだろう。この結果から、第 1 正準係数は「強く、頻繁に影響を与える相互作用パターン」と、「関係への認知的な評価」の関係を示していると考えられる。

考 察

本研究は、因果分析に基づいた対人関係のモデルから、恋愛関係の相互作用パターンが関係安定性に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

相互作用パターンと愛情・関係評価の関係

相互作用パターンの特性と愛情との関係を正準相関分析で検討した結果、「強く親しさを伝える、付き合ってから日が浅い」パターンは「恋愛」が高い、また「頻繁に親しさを伝える、付き合ってから長い」パターンは「友愛」が高いことが明らかとなった。

影響期間に注目してこの結果を考察するならば、Berscheid & Walster(1978)の議論が参考になるであろう。彼女らは、愛について、関係初期は燃えるような炎(熱愛)にたとえられ、その後は穏やかな残り火(友愛)のように続いていくものであるとしている。本研究における、関係初期におけるパートナーに強く親しさを伝えるような関係はロマンティックな愛情(恋愛)を呼び起こし、長期的で頻繁に多様な親しさを伝え合うような関係が、情熱は低いコミットメントは高い愛(友愛)を生み出すという結果は彼女らの指摘と通ずるところがあるだろう。

さらにいえば、ロマンティックな恋愛が穏やかな友愛に変わっていくプロセスが、「強く親しさを伝えること」から「頻繁に親しさを伝えること」に相互作用パターンが変化することによって進展すると理解することもできる。

これには、ある程度関係が進展すれば、わざわざパートナーに親しさを伝えることの重要性が低下していくという説明も可能であるかもしれない。関係の段階が進むにつれ、どんなに親しさをこめた行動をしても依存性の変化が小さくなることは十分考えられるからである。

多様性については、本研究において目立った効果は見られなかった。しかし、Aron & Aron(1986)は彼らの自己拡張モデルにおいて、新奇な体験が熱愛を生み出すことを予測しており、多様性が新奇な体験を生み出す要因として十分考えられる。今後、満足度や愛情との関連を詳細に検討する価値があろう。

関係評価について、正準相関分析の結果は「強く、頻繁に親しさを伝えること」は「認知的な評価」と深い関係があることが示された。すなわち、「カップルとして上手くいっている」、「安定している」という判断、あるいは「将来も一緒にいるだろう」といった予測が「より親しさが伝わるような行動を多く行う」ことによってなされるということであり、妥当な結果であると思われる。特に、相互作用パターンがこのような認知的な側面に影響していたことは強調すべきことであろう。なぜなら、「相互作用パターンが親密な関係が続いている(存在している)かどうかの判断の対象となる」という我々の指摘と一貫するからである。しかし、この結果は清水ら(2003)の「影響強度と多様性が高いカップルは最も安定している」という結果と一部異なっている。これは清水ら(2003)が影響頻度について物理的な頻度を測定していたのに対し、本研究では認知的な頻度を測定していたからではないだろうか。すなわち、関係の評価に影響するのは物理的に会うことではなく、「会っていると思っていること」なのかもしれない。

Table 2 相互作用パターンと愛情の正準相関分析 (重み係数)

正準相関係数	.48 **	.36 *	.12
多様性	-.20	.06	-1.05
強度	.81	.18	-.26
頻度	.31	.50	.77
期間	-.46	.69	.09
親密性	.68	.36	-1.29
情熱	.82	-1.15	.12
コミットメント	-.41	1.09	1.38

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 3 相互作用パターンと関係評価の正準相関分析 (重み係数)

正準相関係数	.51 **	.22	.06	.01
多様性	-.05	-.16	.94	.59
強度	.74	-.14	.26	-.64
頻度	.58	.06	-.77	.55
期間	.03	1.00	.09	-.26
満足度	-.11	.03	.84	.80
継続欲求	.13	-1.15	-.52	.45
安定認知	.59	.02	.60	-1.36
将来関心	.46	.90	-.58	.70

* $p < .05$ ** $p < .01$

満足度や継続欲求が直接的に影響しなかったのは、相互作用パターンからは「利得」や「成果」が見出されないからではないだろうか。すなわち、満足度や継続欲求のような変数は「どのような行動を交換するか」という事象生起の領域と関係するのかもしれない。今後の課題としたい。

本研究の限界と今後の展望

以上の考察をまとめると、本研究のデータから得られた知見は、(1)相互作用パターンが愛情の量的、質的側面を予測すること、(2)相互作用パターンが関係の認知的な側面を予測すること、の2点である。

愛の概念について、現在までに様々な分類や整理が行われてきた。しかし、そのような分類がどのような違いでおこるのか、統一的な議論はあまりなされておらず、十分な理解は得られていなかった(金政・大坊, 2003)。本研究では部分的ではあるが愛情の類型、そして時間的な変容に対して相互作用パターンという1つの枠組みから説明を与えることができた。また、関係が上手くいっているかどうかについての判断が相互作用パターンによってある程度予測されることが示された。このように、本研究のモデルと結果は、どのような相互作用をすることが関係の安定に結びつくのか、という問いに一定の説明を与えたといえるだろう。

次に、本研究の限界・課題を述べる。まず挙げられるのは、多様性の分散が小さいことなどから、相互作用パターン特性の得点化の問題であるだろう。そもそも動的である相互作用のパターンを測定すること自体、非常に困難である。しかし、Kelley et al.(1983)やBerscheid et al.(1989)のように、4つの特性を用いて親密性や相互作用を実証的な研究に耐えうるものとして扱う方法は魅力的である。今後はこれらの特性の測定方法について検討する必要があるだろう。

他の課題では、本モデルが示すような時系列的な研究の必要性があげられる。考えられるのは、相互作用パターンの時系列的な変化を追い、状況的要因との関係を詳細に検討するというものである。そうすることで相互作用パターンや関係の状態の動的な変化について、さらなる説明を加えることができるだろう。

また、本研究がカップル単位で行われていないことも挙げられるだろう。なぜなら、相互作用を問題にする以上、やはりカップル単位の研究が望まれるからである。今日ではカップルの相互依存性をうまく取り扱う分析方法が開発されている(e.g., Griffin & Gonzalez, 1995)。それらを用いることで、カップルの相互作用についてより詳細な分析を行うことができるだろう。

本研究ではKelley et al.(1983)の因果分析モデルをもとに対人関係のループモデルを提案し、相互作用パターンの領域と関係の状態特性との関連を実証

的に検討した。本モデルのねらいは、個人の心理的変化から説明されがちな「愛情」や「関係評価」について、システム内の相互作用から理解し、恋愛は二人が相互に作り出していくものであることを示すことである。本研究の結果はそのねらいを部分的にも果たすことができたといえるだろう。

対人関係のループ・システムモデルについて、本研究はまだ一部分しか実証的に検討していない。しかし、このモデルはあまりに抽象的・包括的であるので、モデル自体の妥当性を実証的に問うことはできないと思われる。ループ・システムモデルはあくまで対人関係を理解する「枠組み」であり、予測を目的としたものではない。それはこのモデルにループが存在し、自己言及的であることから指摘される。因果関係を明らかにすることが目的とされる社会心理学の科学的研究では、自己言及性はモデルとして重大な弱点であるとも考えられるからである。とはいえ、親密な関係に関わらず、関係の維持がそのまま関係の目的となる現象は自己言及的・再帰的であるといわざるを得ないはずである。そのための方法論を社会心理学はまだ十分に確立したとは言えないだろう⁴⁾。より深い対人関係の理解に向けて、新たな方法論の採用や構築も必要とされてきているのではないだろうか。

引用文献

- Arriaga, X. B. & Agnew, C. R. 2001 Being Committed: Affective, Cognitive, and Conative Components of Relationship Commitment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 1190-1203.
- Aron, A. & Aron, E. N. 1986 Love as expansion of self: Understanding attraction and satisfaction. New York: Hemisphere
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. N. 1989 The Relationship Closeness Inventory: Assessing the Closeness of Interpersonal Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.
- Berscheid, E. & Walster, E. 1978 *Interpersonal Attraction*. Reading, MA; Addison-Wesley.
- 大坊郁夫 2001 対人コミュニケーションの社会性 対人社会心理学研究, 1, 1-16.
- Dutton, D. G. & Aron, A. 1974 Some evidence for heightened sexual attraction under conditions of high anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 510-517.
- Filsinger, E. E. & Thoma, S. J. 1988 Behavioral Antecedents of Relationship Stability and Adjustment: A Five-Year Longitudinal Study. *Journal of Marriage and the Family*, 50, 785-795.
- Gottman, J.M. 1979 *Marital interaction: Experimental investigations*. Academic Press.
- Griffin, D. & Gonzalez, R. 1995 Correlational Analysis of Dyad-Level Data in the Exchange

- Case. *Psychological Bulletin*, 118, 430-439.
- Hazan, C. & Shaver, P. R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 飛田操 1991 青年期の恋愛行動の進展について 福島大学教育学部論集, 50, 43-53.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究, 10, 11-24.
- 神菌紀幸 2000 親密な2者関係へのコミットメント・プロセス研究の現状 志学館大学文学部研究紀要, 21, 81-101.
- Kelley, H. H., Berscheid, E., Christensen, A., Harvey, J., Huston, T. L., Levinger, G., McClintock, E., Pelau, L. A., & Peterson, D. 1983 *Analyzing Close Relationships*. Kelley, H. H., Berscheid, E., Christensen, A., Harvey, J., Huston, T. L., Levinger, G., McClintock, E., Pelau, L. A., & Peterson, D. 1983 *Close Relationships*. New York: W. H. Freeman and Company.
- Kelley, H. H. & Thibaut, J. H. 1978 *Interpersonal relations: A theory of interdependence*. Wiley-Interscience.
- Lewin, K. 1950 *Field theory in Social Science*. New York, Harper. 猪股佐登留(訳)社会科学における場の理論 誠信書房
- 増田匡裕 1994 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, 34, 164-183.
- 松井豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.
- 松井豊 1998 恋愛に関する実証的研究の働き 松井豊(編) 現代のエスプリ 恋愛の心理 至文堂
- Newcomb, T. M. 1961 Interpersonal Balance. In R. P. Abelson (ed.) *Theories of Cognitive Consistency*. Rand McNally.
- Rusbult, C. E. 1980 Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*, 16, 172-186.
- Rusbult, C. E. 1998 The Investment Model Scale: Measuring commitment level, satisfaction level, quality of alternatives, and investment size. *Personal Relationships*, 5, 357-391.
- Simpson, J. 1987 The Dissolution of Romantic Relationships: Factors involved in Relationship Stability and Emotional Distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 683-692.
- Sternberg, R. J. 1986 A triangular theory of love. *Psychological Review*, 93, 113-135.

註

- 1) 「Causal Condition」の訳は本来「因果条件」となるべきであろうが、ここでは対人関係システムの状態すべてを含む領域という意味であえて「状態特性」という訳語を用いた。
- 2) ここでの「パターン(型)」という語は付き合い方が型にはまっているのではなく、恋愛関係に共通する構造が含まれていることを意味している。すなわち、相互作用パターンによってこそ我々は恋愛関係を恋愛関係として認識できるということができるかもしれない。これは Wish et al.(1976)の対人関係の認知次元の議論と関連している。
- 3) このモデルでは、一方向ループしか仮定していない。すなわち、相互作用パターンは事象生起の領域に直接影響を及ぼすのではなく、状態特性の領域を介して間接的に事象生起に影響するということである。
- 4) 自己言及性を扱う方法論として、ゲーム理論やセルラーオートマトンのようなシミュレーション・モデルが考えられる。

The effect of interaction pattern on the relationship evaluation and degree of love to partner in romantic relationships

Hiroshi SHIMIZU (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

The purpose of this research was to reveal that stability of romantic relationships was predicted by interaction in couple. At first, we argued about Causal Analysis of Kelley et al. (1983) who focused on interaction in close relationships, and suggested a model that close relationships were classified into three domains (Phenomenon occurrence, Interaction pattern, Causal condition). Then, based on the model, how the interaction pattern in romantic relationships affects the relationship evaluation and degree of love to their partner were examined. The participants were 119 undergraduates (74 male, 45 female) who were currently involved in romantic relationships. The results of the analysis showed that participants who expressed closeness strongly and had dated with their partner for a short period tended to feel passionate love, and that participants who expressed closeness frequently and had dated with their partner for a long period tended to feel companionate love. Moreover, participants who showed closeness frequently and strongly gave their relationships high evaluation in cognitive aspects.

Keywords: interaction pattern, love, relationship evaluation, romantic relationships, Causal Analysis